

富山如大地

— 第147号 —

発行人
長澤 秀豊

発行所 富山市総曲輪2丁目8-29
真宗大谷派富山教務所

編集 富山教区如大地編集委員会

電話 076-421-9770 FAX 076-421-9799

教区・別院ホームページ

富山東別院

検索

教務所アドレス toyama@higashihonganji.or.jp

帰敬式特集号

自ら仏に帰依したてまつる

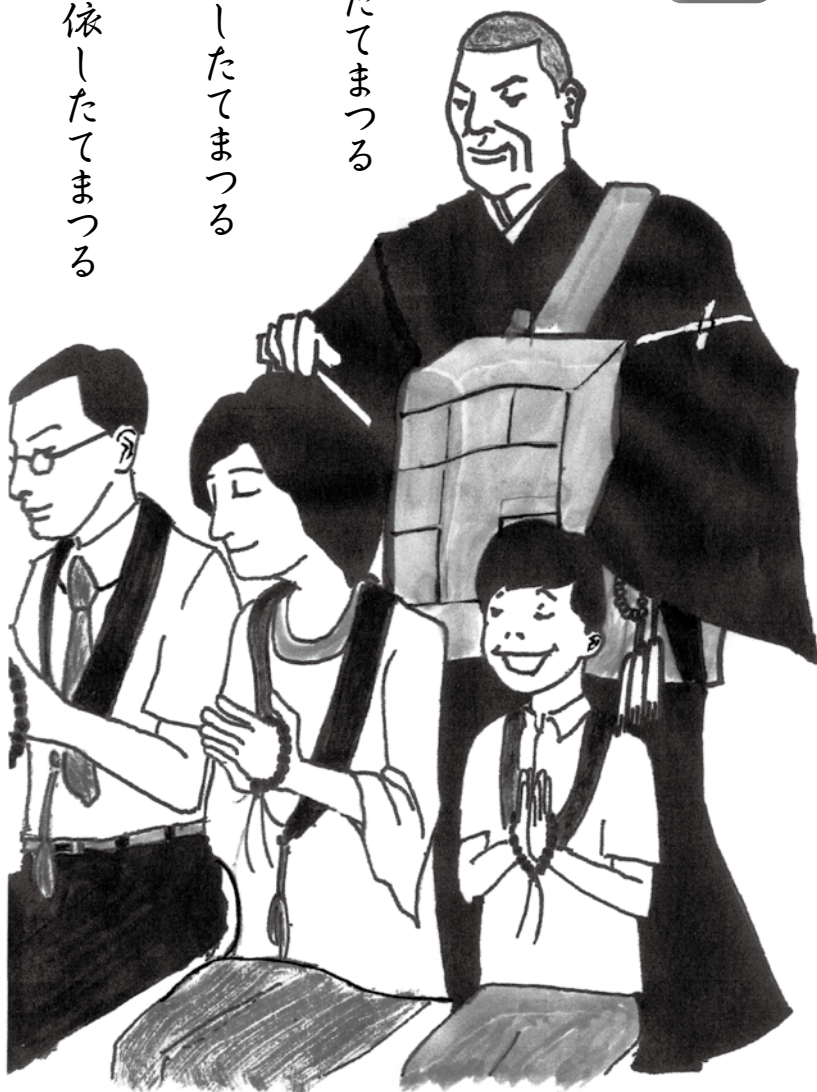
自ら法に帰依したてまつる

自ら僧に帰依したてまつる

寺離れ、仏事の簡略化という流れが大きくなっていく昨今、宗派では、帰敬式受式を契機とし、あらためて念仏申す真宗門徒の生活を始める方が増えていくことを願っております。

富山教区では、「帰敬式実践運動推進計画」のもと、真宗本廟・別院報恩講・各寺院での受式奨励をすすめる形で展開しております。

本誌では、今号を「帰敬式特集号」として、受式奨励の一助となることを願い、様々な取り組み等について紹介します。



【富山教区教化テーマ】

「なむあみだぶつ」を訪ねませんか？

卷頭言

*** 帰敬式実践運動が慶讃法要に向け推進されていく中で・・・ ***

数か月前に、あるご門徒の方が法事の打ち合わせに夫婦で来寺され、その際に法名の依頼を受けた。野暮な質問かとも思ったが、理由を聞いた。「自分たちも七十歳を超え、そろそろ法名を持っていないと恥ずかしい歳になってきた。親の葬儀を勤める際、法名軸となつて既に用意されていたことが、すごくありがたかった。子供たちに負担をかけないためにも親のつとめとしてやっておかねばと思い、あわせてお願いしたい」とのことだった。

承諾をした上で、帰敬式を受ける意義について説明をさせていただいたが、あまりピンときていない様子。伝える私の技量にも問題があるが、最近よく耳にする「終活」の一環として法名を望んでおられるようである。その後も、帰敬式について話す機会を設け、法要当日に再度、子や孫・親戚の前で受式や剃刀の意義等について説明を行い、帰敬式を行った。神妙な顔で領いておられる夫婦の様子から、時間は多少かかったけれど、少し理解いただけたのではないかと思っている。

自坊のある地域では、高齢の方は法名を持つておられる方が比較的多く、生前に受式するからこそ本来の意味があると理解されている方もまだ多いように感じる。しかし、団塊の世代になると、帰敬式はもちろん、報恩講や祠堂経会、他にも御影様など地域に根づく仏事が、年々伝わりにくくなっているように感じる。

帰敬式実践運動が慶讃法要に向け推進されていく中、「終活」の一環ではなく、一人でも多くの念仏申す真宗門徒の生活が始めるためには、帰敬式を受式する意義を私たちが責任をもって伝えていかなければならない。

二〇一七年 富山別院 報恩講法話

「帰敬式法話」

北海道教区南第三組

法誓寺

住職

黒萩くろはぎ昌氏まさみ

この法話録は、二〇一七年十月七日、富山別院報恩講期間中、黒萩昌氏よりお話しされたものに加筆・修正いただいたものです。

私たちが「南無阿弥陀仏」とお念仏申す、仏の名を呼ぶということは、その時すでに如来の光明に照らされているということです。光明に照らされているということは、私が私の罪の深さと愚かさの深さで思い当たっているということなんです。

私たちは、実は本当の自分を知らないまま生きていくのです。自分の罪の深さと愚かさ、他人の前では言葉遣いや行動に気をつけて生活していますが、しかし、自分の一番安心できる場所、我が家に居る時には無意識のうちに本性が表に出ているのです。家庭生活の中では、

私たちのわがままで身勝手な根性が垂れ流されています。無意識のうちにですから無自覚なんです。ですから、そこで一番迷惑をかけている家族に対してどうしても頭が下がっていかないので。

そこに夫婦や親子が中々出会っていけないという問題があります。出会うということは、わがままで身勝手な我が身の自覚に立つて、その人に頭が下がるということです。このことを私たち真宗門徒は「頭が上りよのない世界をいただく」と言ってきました。その「頭の上りよのない世界」を、「自覚」において私たちの上に開いてくれるはたらきが如来の本願です。そ

して、少しずつ我が身の事実に目覚めていくことを、如来のお育てにあずかると言います。

私たちは深い罪業を抱えて生きてきました。我が子のためと言いながら実は自分の満足のためでした。親のため妻のため夫のためと言いながら、親や妻、夫を利用してきました。罪深い愚かな身であったという証拠が、私たちの生活の中に満ち満ちています。しかし同時に、このことのひとつひとつが、私たちが本当の自分を知るための大事な持ち札なのです。無駄なものひとつありません。

私たちは、ただ煩惱に流されて生きてきたにすぎません。しかし、この流転の人生において、如来が「本当の自分に気づけ気づけ」と私たちに呼びかけ仏道を行ってくださっていたのです。そういう意味では人生そのものがすでに仏道だったんですね。ですから無駄なものひとつもないのです。そうすると、私たちの過去がそのまま仏道として大きな意義をもってきます。私たちがこれまで経験してきたことのひとつひとつが、私に私の罪と愚かさ、私の身の事実を教えてくれるかけがえのない持ち札だったので。この一点に立つたら、これまでの人生で出会ってきたこと全てをまるごといただけるはず

なんです。

今までいろんなことに会って来たように、私たちはこれからもいろんなことに会っていかねばならないのだと思います。もしかしたら、今まで以上に辛いことに会っていかねばならないのかもしれない。

これまでもお互い辛いことにも会ってきましたが、なんとか頑張って生きてこれました。何故頑張れたかという、色々なことがなんとなく間に合ってきたからですね。おいしいものを食べるだけで幸せを感じる事ができました。着てみたいと思っていた服を買った時には、ウキウキして外出したくなったりもしました。行ってみたいと思っていたところに行けた時は、それだけで大きな喜びでした。不安をこまかすものはまわりにたくさんありました。結婚や子育ても私たちに生きる目標を与えてくれました。

しかし、よくよく考えてみると、事実として、おいしい食べ物も気に入った服も、旅行もやさしい家族も、最後は全て間に合わなくなるのです。年を重ねるとともに、ひとつひとつのことが、実は間に合わないものであったという事実

があらわになってきます。その時に、私たちにとつてのごまかしのきかない人生がはじまるのかもしれない。しかし、そのことは無意味なことではありません。何故ならば、もともと間に合わないものであったものを、間に合わないと感じかされるそのことが、人生を根底から問い直す大事な機縁となるからです。

いざとなると人間は弱いものだと思います。病気になる、だんだん身体が弱ってくる。そして痛みと苦しさの中、やはり私たちはイライラしてくるのではないのでしょうか。そのイライラはどこに向かうかというと、まわりにいる身近な人々でしょう。まわりに当たっていくんですね。「自分がだんだん弱っていくのに、妻や友だちはみんなあんなに元気だ、なぜ自分だけ」と思うんですね。病状が進めば進むほど、愚痴と怒りの根性が自分の中を駆け回るのだと思います。病気になるということはそういうことではないかと思えます。そしていったんそこに落ちたら、もうそこから自力で這い上がることは不可能です。

突発性間質性肺炎で六十二歳の若さで亡くなった祖父江文宏先生そふえふみひろもまた、苦しい闘病生活

の中で、どこにもつていきようもないご自身の怒りの心をもてあましたことが幾度もあったのだろうと思います。そんな祖父江先生の詩集に

文宏よ おまえはなんの不足があつて
怒るのか これほどに ひとびとの愛に
囲まれていながら 何の不足があるのか
なぜ 怒るのか お前を見捨てているの
は お前だけだ

という一編の詩があります。これは祖父江先生ご自身のいのちの根底から聞こえてきた如来の声なのでしょう。そしてその如来の声に照らされて、祖父江先生に「ひとびとの愛に囲まれていながら、ひとり怒っている」ご自身の姿が見えてきたのでしょう。これを自覚ということです。ここに愚痴と怒りのただ中であって、その愚痴と怒りの心を超えていく唯一の道があるのだと思います。

人は、年を重ねるとともに「家族に迷惑をかけないように命終えていきたい」という気持が切実になってくるようです。しかし、中々そうはいきません。死の縁は無量です。どんな死に



黒萩 昌氏

北海道教区第3組法誓寺住職。
約20年間、本山・同朋会館教導としてもご活躍

方をするのかは全くわかりませんし選ぶこともできません。祖父江先生もまた辛い闘病生活の中、ご自身の怒りの心に翻弄されたこともありました。しかし、そこに道を開いてくれるのが自覚です。自分を知ること、罪深く愚かな身の事実を知ることなんですね。

私たちは、これから一人暮らしになるかもしれません。施設や病院のベッドの上で一人で死んでいかなければならないのかもしれない。どのようなかは全くわかりません。しかし、どんな身になっても、お念仏がそこに自覚の道、自らに目覚めていく仏道を開いてくれます。お念

仏があればそこはいつでも仏道そのものなのでしよう。そのことを宗祖は

念仏者は、無碍の一道なり

〔歎異抄〕真宗聖典 六二九頁

と教えていただきました。

「本当の自分を知ってほしい」ただそれだけが如来の本願の願いです。そう考えると、私が私に目覚めるために、本当の自分を知るためには何ひとつ無駄なものはないのです。全てが自覚の材料です。そこに、これまでの人生に何かを足す必要もなく、これまでの人生から何かを引く必要もなくそのままをいただける身にさせてもらう。そして同時に、これから何があっても無駄なものはない、生きていける、そういう身をたまわっていくのでしょうか。過去のこと一切に無駄がなかったように、これからどのようなことに遭ったとしても、私が私を知るためには無駄なものはないのです。人間は、過去を悔いて未来を案じ、今生きていることの意味を失っていく存在です。しかし、その過去と未来と現在の一切が「自覚道」として深い意義を持つてくる教えがあるとすれば、

そこにこそ私たちの本当の救いがあるのだと思います。

私たちにとっては、過去と未来と現在、三世がまるごと救われなければ本当の救いとはならないのです。「我が人生に悔いなし」と言い切れる智慧と、どのようなことに遭っても生きていくという確信、この二つが与えられてはじめて、私たちは今を生きていく力をたまわっていくのだと思います。何があっても、私が生きていることの意味を失わない。私が生きてきたことを軽く見ない。ここをもらうことが我々にとつての本当の救いです。

仏法聴聞ということは、難しい仏教用語を一生懸命勉強するというものではありません。私の身の事実、私の罪深さと愚かさ、自力無効を教えてもらう歩みなのです。罪深くないものに、無理やり「罪深いと思え」という話ではありません。ただ我が身の事実を知りなさいという教えなのです。私たちは自分自身を色々なもので飾って生きています。仏法聴聞ということは、その飾りが一枚一枚はぎとられていくということです。そして全部はぎとられて最後の最後に残るのが、

さいあくじんじゅうばんのうしじょう しめじょう
罪惡深重煩惱熾盛の衆生

〔歎異抄〕真宗聖典 六二六頁

という私の事実なんです。そしてその「罪惡深重煩惱熾盛の衆生」を「たすけんがための願」こそが弥陀の本願です。

「罪惡深重煩惱熾盛の衆生」というところに立つことができた時、私たちの頭が下がる。頭の上げようのない広大無辺の広い世界に出させてもらうのです。夫に妻に頭が下り、我が子、我が親に頭が下がる。そして一切衆生、我が人生まるごとに頭が下がっていく時をもらうのです。

なごりおしくおもえども、娑婆の縁つきて、ちからなくしておわるときに、かの土へはまいるべきなり

〔歎異抄〕真宗聖典 六三〇頁

これが親鸞聖人のご信心の世界です。やはり名残惜しいんですね。真宗はこの人間の弱さや情を否定しません。人間の弱さや情をそのままにして人生に対する心からの満足と頭の下がる世界を与えてくれるのです。

もし「自分はこの娑婆に何の未練もない、いつ死んでもいい」と言う人がいるとしたら、その人はせっかく人間に生まれながら、名残惜しい、別れがたいと思う人に一人も出会うことができなかったということです。大事な人と出会っていればこそ、その人との別れが名残惜しいのです。であればこそ、名残惜しいという心をそのままにして生死を超えていく道が私たちに必要なのでしょうか。

私たちは本当はその道がほしいのです。真宗の教えはその道を自覚において私たちひとりひとりに与えてくれます。私たちは「南無阿弥陀仏」と仏の名を呼び、念仏申して本願のはたきに照らされていくんですね。そして照らし出された「罪深く愚かな」身の事実に、「その通りでした。これが私でした」とうなづく。これを自覚といいます。

その自覚のためには材料がいります。照らし出されてうなづくには材料がいるのです。そしてその自覚の材料は私たちにはたくさんあります。私たちは元来「わがままで身勝手に自分のためにしか生きることのできない」存在です。その根性を理性で何とか抑え込んでいるつもりでいるのですが、実は日常生活の中に無意識の

うちに限りなく漏れ出ているのです。その漏れ出ている根性が私たちの自覚の材料です。私たちが自分自身に目覚めるための材料は、日常生活の中に宝の山のようにたくさんあります。

仏教を勉強すると言いますが、真宗は教えを対象化して知的関心で学ぶような、そういう教えではありません。本願のはたらきに照らされて、我が身の罪の深さと愚かさに限りなく目覚め続けていく歩みなのです。

母親の「私があなたのお母さんよ」という名のりを通して、子どもが母親の愛情にふれていくように、私たちは「南無阿弥陀仏」という本願の名告りをとおして、本願のはたらきに照らされて我が身を知なのです。そしてそこで知らされた身の事実に「そうでした、これが私でした」とうなづく。ただそれだけです。そこに理屈は何もありません。

加藤辨三郎かとう べんざうろうという方がおられます。この方は京都大学に在学中にチフスにかかられたことを機縁に金子大栄先生をとおして仏教に出会っていかれます。その加藤辨三郎さんがこんなことを言っておられます。

南無阿弥陀仏、この念仏をほんとうに心からとなえられるようになって、はじめて、仏教の真実信を探り得たといえよう。私も、となえてはじめてそれを知った。私が素直な気持ちで、念仏をとこなえることができるようになったのは、五十歳を過ぎてからのことである。南無阿弥陀仏ということが何のことであるか、さっぱりわからなかった。念仏をとこなえなくつても、教えを聞き、したがっておれば、それでいいじゃないかと思ってみたり、ときには、自分のような汚れた心のものが念仏をとこなえるなどは、偽善じゃないかと考えたり、迷いに迷った。仏教の教えは本当に良い教えであるということとが頭の中でわかっていながら、どうしても、南無阿弥陀仏が口について出てこない。そうした迷いを抜けるのに、相当の時間を費やさなければならなかった。迷いに迷い、悩みに悩んでの末、刀折れ矢尽きた思いで、念仏をとこなえるようになった。となえてみて、はじめて、念仏が何を教えていたかということがわかってきた。この六字に秘められた仏教の真

実信というものが、はっきりとわかってきた。念仏をとこなえなくつても、教えを聞き、したがってさえおればいいじゃないかという、かつての考えは逆転し、念仏をとこなえずして、ただ観念的に仏教を知ったとて、何にもならないということがわかったのである。

（『いのち尊し』加藤辨三郎）

真宗の教えは、「南無阿弥陀仏」と仏の名を呼び、念仏申して限りなく自らに目覚め続けていく歩みです。ただそれだけなのですが、その「念仏申す」ということが私たちにとっては本当に難しいことなのです。「南無阿弥陀仏」の意味が分かって納得してから、はじめてそこで「それでは念仏申します」ということになる、これが私たちの常識的なものごとの順序です。しかし加藤辨三郎さんは「となえてみて、はじめて、念仏が何を教えていたかということがわかってきた。この六字に秘められた仏教の真実信というものが、はっきりとわかってきた」とおっしゃっています。

寺の御堂に座って「南無阿弥陀仏」とお念仏申していたお同行の姿を思い起こしますと、その時、みんな罪深く愚かな自分自身に出会っておられたのではないかと思うことがあります。念仏申す時、私たちはすでに本願のはたらきに出遇っているんですね。そのお念仏を蓮如上人は「仏恩報謝のお念仏」とおっしゃいます。私たちの申す念仏は「仏恩報謝」という意義を持つものでなければなりません。私たちは、親鸞聖人の御遠忌を機縁として、「ただ念仏して」という言葉の重さを今一度いただき直さなければならぬのではないでしようか。

帰敬式法話ということですが、帰敬式（おかみそり）を受けて、法名をいただくということは、それまで自分の価値観、人間の価値観をよりどころとして生きてきた者が、仏弟子の名のりを境に今度は「本願の教え、お念仏を唯一のよりどころとして生きる者となります」ということを宣言するという大事な意味があります。どうぞ、仏法聴聞とお念仏のある生活を大切にお暮しいただきたいと思います。

時間がまいりましたので終わらせていただきます。ありがとうございます。

（了）

帰敬式を通しておもうこと

二〇〇八年、教師資格を取得し勢いづいた私は自坊の同朋会復活を住職に持ち掛けた。夫は全て任せると応じてくれた。

怖いもの知らずの私は聞法会、女性の会、そして寺子屋。さらに永代祠堂経会前日に開催する帰敬式を始めた。

当初は珍しさもあり其々に盛況だったが言わずもがな問題を抱えることになる。特に帰敬式ではここ数年受式を希望するのは一人か二人、参加者の無い年もある。

そのような中で『真宗入門講座』への誘いを受ける。帰敬式を奨励する宗門の意向のもと講座を開催するというものだが、仏事はすでに形骸化し世の中の価値観もコロナ禍により劇的に変化している。この状況下で受式者を増やすというのは厳しい。しかし引き受けた以上あらためて問題を見据えなくてはならない。

本来の問題とは何なのだろう。突き詰めれば最後は自分自身に立ち帰ることになる。身近にあるはずのお聖教に応じることもなく帰敬式の意義だの大切さなどと持論を振りかざしても何も伝わらない。そのことを自覚することもなく現状に腰を下ろせば自ら学ぶこともなく危機感はどこまでも他人事である。肝に銘じたい。

第十二組 勝福寺 大中臣 千恵美

富山教区帰敬式リーフレット

「法名をいただいて 今を生きる」作成の願い

最初の作成委員会でリーフレットに必要と思われる文章を持ち寄ろうということになり、二回目に私が作っていた文章が趣旨文のような形で採用されたのだと記憶しています。Q & Aは委員から出された質問への答えを、そのまま文章にする形で作成されました。

この文章の念頭にあったのは「帰敬式はスタートである」ということです。現在帰敬式、おかみそりといいますが、葬儀の直前に受けるものというイメージが強いです。年を重ねてそろそろ私も…というような、極楽浄土へまいる片道切符をもらうような儀式として考えられています。帰敬式はそうした終わりの儀式ではなく、改めて人生のスタートラインに立つ式であることを強調しました。

また、この文章では何をスタートするのかという内容として「四苦を問う」ということを中心に書きました。帰敬式は仏弟子になる儀式です。それはお釈迦さまと同じ問いをもち、問い続けることであると私は思います。その基本にあるのが四苦であるということです。エンディングノートを書くように、最期のためにおかみそりを受けるのではなく、改めて生・老・病・死を見つめなおす。それが新たな聞法、お寺にご縁を持つきっかけになると考えました。

玉永寺ではこのところ、報恩講でのお参りが減少しています。このパンフレットを配布し、毎年報恩講の際に寺を会場に帰敬式を執行し、教えを聴く朋と出会い、同朋会活動に誘う新たなきっかけにしようと計画しています。皆様ぜひご利用ください。

帰敬式リーフレット作成委員会 主査

第十一組 玉永寺 住職 石川 正穂

帰敬式リーフレット作成委員会に参画して

富山教務所から、帰敬式を勧めるリーフレットを作りたいので門徒の立場から忌憚のない意見を出して欲しいとお話があり、住職二名、門徒四名にデザイナーの方も加わり、昨年十一月から今年の四月まで四回にわたり作成委員会に出席しました。門徒としても住職方にリードして貰いながら日頃感じている帰敬式の受式方法、法名についての疑問等いろいろな問題点について、ざっくばらんな雰囲気の中で発言できていたのではないかと感じています。

私が帰敬式を受式したのは母の葬儀がきっかけでした。法要の席で住職から「六十にもなったのならお寺へ話を聞きに来たらどうだ」と言われ、推進員講座に参加し、同朋の会へも入会しました。二年後に本山で「学明」という法名をいただいたのですが、当時法名には自分の名前が一字入るものだと思い込んでいた私は少しガッカリしたものでした。しかし、翌年に妻が「知明」という法名をいただき、今は夫婦セットの法名に気づき感激ひとしおです。

聞けば聞くほど仏法は難しく、「学明」の法名にふさわしいものは何も身につけていませんが、六年前の聖人七百五十回御遠忌法要の「百人百話」では五十五名の善智識に出会うことができました。「自分の本当の姿は何なのか」について改めて深く考えさせられると同時に、それに対して答えが出せていない自分があることに気づかされました。

今年は法名をいただいた二度目の誕生日から数えて二十年、成人の年にあたります。この委員会での経験がもう一度自分の足元をしつかり見つめ直し生きていく機縁になればと思っています。

第九組 西光寺 門徒 吉野 正敏



帰敬式ききようしきとは

帰敬式（おかみそり）とは、三宝さんぼうをよりどころとし、法名をいただき、お釈迦さまの弟子として新たな人生の出発をする儀式です。三宝とは人生の本当の宝のことです。一つめの宝「仏」は、人間として本当に深く豊かに生きる道に目覚められたお釈迦さまです。

二つめの宝「法」は、お釈迦さまが説かれた南無阿弥陀仏の教えです。

三つめの宝「僧」は、お釈迦さまの教えを大切にして生きる人々の仲間です。

私たちは本当の宝を知らない、どんなにお金や物があっても、健康で長生きしても、本当の幸せを感じることができないのではないのでしょうか。お釈迦さまの弟子として教えを聞きながら、深く豊かな人生を生きてゆこうではありませんか。

Q&A

帰敬式リーフレットに記載できなかった質問をこちらに掲載しています。

Q. 戒名ではなく法名というのはなぜですか？

A. 戒名は戒律かいりつを守って修行する人の名です。私たちは出家して厳しい戒律を守る出家信者ではなく、仏さまの教えを聞きながら深く豊かな人生を生きていく在家信者として、お釈迦さまの弟子となります。その証あかしとして、仏さまの願いがかけられた法名をいただくのです。

Q. 法名は亡くなった後の名前ではないのですか？

A. 教えを聞いていきいきと生きていくことを誓う仏弟子ぶつでしとしての名前ですので、生きている時にこそいただく名前です。お葬式の時にのみかみそりをされることがありますが、仏さまの願いがかけられたありがたい法名を本人が知らぬまま死んでゆくのは、大変もったいない、残念なことではないでしょうか。

Q. 生前に法名をいただくと、不幸なことが起こると聞いたことが……

A. 法名を亡くなった人の名前と考えるからそういう迷信が起こるのです。お釈迦さまは、亡くなった人に向かって説法をしたことはありません。私たちが生きている間に、本当に幸せで安らかであってほしいという、お釈迦さまのお慈悲のおこころが私たちにかけられているのです。法名をいただいても、ただかなくても、人間は老・病・死を避けることはできません。だからこそ、生きているうちに老・病・死の苦しみを乗り越える本当の道にでありたいものです。

Q. 法名のはじめにつく「釈」「尼」の意味は？

A. 法名は、必ず「釈（尼）○○」という形になります。これは、お釈迦さまを先生として、その一字をいただいているということです。性別が分かるよう、女性の場合は釈のあとに「尼」の字が入りますが、特に深い意味はありません。

Q. 法名には俗名の一字を入れるものですか？

A. 特に決まりはありません。入っていても、入っていなくても良いのです。

Q. 法名はどのように決まりますか？自分の希望する法名にできますか？

A. 法名の選定については、住職選定と、本山（東本願寺）選定の二つの方法から選べます。法名についての希望がある場合、住職選定なら住職と相談してみてください。本山選定の場合は『仏説無量寿経』というお経の言葉の中から法名が選定されますので、希望はできません。そもそも、法名はペンネームや雅号ではありません。自分の思いを超えて、仏さまから「いただく」ことが大事であり、自分の思いや計らい（わがまま）でつけるものではありません。

Q. 法名と院号との関係は？

A. 院号とは、お寺の護持に特に貢献して下さった方への賞典として授与されるもので、

明日ありと

思ふ心のあだ桜

夜半に嵐の

吹かぬものかは

法名とは別物です。現在の制度では、本山へ八万円以上の懇志を納められた方に対して院号が授与されます。あくまでも賞典ですから、生前にいただくこともできます。

Q. 帰敬式を二回以上受けたら、他宗派の法名・戒名をいただいてもいいのですか？

A. 帰敬式を受けるのは人生で一回です。法名・戒名をたくさんもらえばその分功德があるなどということはありません。いただいた法名とそこにかけられた願いを大切にしながら、



教えを聞く人生を歩みましょう。

Q. いただいた法名紙はどうすればよいですか？

A. 丁寧に保管しておきましょう。お内仏（仏壇）の引き出しの中に入れている人が多いようですが、何より自分の法名を忘れず、かけられた願いに導かれながら教えを聞いていくことが大切です。額に入れるなどして目に見える所に飾っておくのも良いでしょう（法名紙専用の額を本山で頒布しています。）

Q. 帰敬式を受けるとどうなる？ 何が変わる？

A. 帰敬式を受けるということはお釈迦さまの弟子となることです。つまりお釈迦さまを先生として、その教えを聞いていく人生が始まります。帰敬式を受けなくとも教えは聞けるではないかと思うかもしれませんが、しかし、法名をいただいているのといないのでは、仏弟子の自覚という点で違いが出るのではないのでしょうか。入門のため、まず帰敬式を受けることをお勧めします。

Q. 教えを聞いていくとどうなるのですか？

A. 教えを聞いていくことは、私が私として、私が入間として生まれたということはどういうことであるのかをたずねていくことでもあります。教えを聞いていくメリットをあえて表現してみますと、「私の人生をもっと深く生きていくことができる」「意欲を持っていきたいと生きていける」「今まで気づかなかったことに気づかされ、今まで見えなかったことが見えてくる。聞こえなかったことが聞こえてくる」などが言えるかと思えます。

Q. 教えを聞くにあたっての大切な心構えは、「自分のこととして聞く」ということです。常に、「あなたはどうか」と自分のことを言われているつもりで聞いていきましょう。

A. さて、南無阿弥陀仏の教えを聞いていくことを「聞法」といいます。具体的にまずは朝晩、家のお内仏（仏壇）の仏さまに手を合わせ、念仏を声に出して称え、正信偈のお勤めをしましょう。忙しくとも、日に一回は仏さまの前に身をすることが大切です。念仏申すのも、正信偈を読むのも、実は仏さまの願いと教えを私が聞いていることになるのです。もしアパート暮らしなどでお内仏が置けない場合は、小型の三折本尊等も用意してありますので、富山教務所（TEL〇七六―四二一―九七七〇）までお問い合わせください。つぎに、所属のお寺の行事や聞法会にお参りして、法話を聞きましょう。その後は所属のお寺に限らず、他寺でもよいので法話を聞きに行きましょう。お寺によっては毎月一回以上のペースで聞法会を開いている所もあります。富山別院でも毎月十五日に法話がありますので、ぜひお越しください。また、月参り等の際にでも直接お寺さんに分からないことを質問をされてはどうでしょうか？それから、東本願寺からも様々な教えに関する本が出版されて

いますので、読んで学ぶのもよいでしょう。お買い求めの際は、インターネットでの通販（<https://higashihonganji-shuppan.jp/>）をご利用いただくか、もしくは富山教務所（TEL〇七六―四二一―九七七〇）までご連絡ください。

帰敬式を受ける方法

① 真宗本廟（東本願寺）での受式

団体参拝や奉仕団で上山したとき、また個人の参拝でも受式できます。詳しくは、所属するお寺や富山教務所へお問い合わせください。

② 富山別院報恩講での受式

毎年十月六日～八日に行われている富山別院報恩講の期間中、七日に帰敬式が行われます。九月上旬までに、所属するお寺を通してお申込み下さい。

③ 住職による受式

詳しくは所属するお寺にお問い合わせください（すべてのお寺で行っているわけではありません）。

費用

受式者お一人につき冥加金（お礼金）一万円をいただいております。②と③の受式の場合、他に費用がかかる場合もあります。

【お問い合わせ】

富山教務所 〇七六―四二一―九七七〇
富山別院 〇七六―四二一―三三二七
toyama@higashihonganji.or.jp

教区役職者の改選

①教区会正・副議長

(任期：二〇二〇年四月二十四日～二〇二三年十二月二十三日)

議長 石川 正穂 (第十一組 玉永寺)
副議長 永崎 暁 (第十組 永宗寺)

④副組長

(任期：二〇二〇年四月二十四日～二〇二三年十一月三十日)

第十三組 正覺寺 小塚 弘道

第九組 長光寺 長守 覚昭

永源寺 島倉 慶晃

第十組 覺順寺 信耀 祐顯

淨光寺 齊藤 弘顕

第十一組 祐教寺 佐伯 淳

第十二組 光顯寺 種昂 宣弘

第十三組 善念寺 岩田 一定

光誓寺 西山 恵紹

雲龍寺 藤谷 英順

⑦教区坊守会

(任期：二〇二〇年七月一日～二〇二三年六月三十日)

会長

第十三組 雲龍寺 藤谷 美穂

副会長

第十一組 養照寺 藤谷 不二子

副会長

第十三組 勝蓮寺 河村 志乃生

会 計

第十組 淨光寺 齊藤 美和子

庶務

第九組 西光寺 源 美佳

②教区会参事会

(任期：二〇二〇年四月二十四日～二〇二三年十二月二十三日)

第九組 西光寺 源 大寿

第十組 永福寺 長 真寿

第十一組 等通寺 高谷 純夫

第十二組 長樹寺 前田 潤

第十三組 正覺寺 小塚 弘道

同補充員一

第九組 中堂寺 五十嵐 浄和

同補充員二

第十二組 安成寺 塚本 正明

③組 長

(任期：二〇二〇年四月二十四日～二〇二三年十一月三十日)

第九組 西光寺 源 大寿

第十組 永福寺 長 真寿

第十一組 等通寺 高谷 純夫

第十二組 長樹寺 前田 潤

⑥教区教化委員会

(任期：二〇二〇年六月一日～二〇二三年五月三十一日)

〈寺族研修小委員会〉

幹事 藤 條 法彰

副幹事 庭田 龍信

〈門徒研修小委員会〉

幹事 高見 敏明

教化日誌

(二〇二〇年一月一日～六月三十日)

1月

- 1日 初参り・初鐘の集い
 10日 青少年スタッフ会
 15日 『如大地』編集会議、ご命日のつどい【幽溪 浩】、
 門徒・寺族総合研修会（～16日）
 20日 第十一組組会・門徒会合同会（教区改編説明会）
 21日 教区坊守会報恩講
 24日 解放運動推進協議会
 27日 共学研修会【佐野明弘】
 28日 社会教化小委員会
 29日 第九組・第十組合同教区改編説明会、第九組組会
 30日 第十組組会
 31日 第十二組組会（教区改編説明会）

2月

- 3日 婦敬式リーフレット作成委員会
 4日 第十三組組会、声明作法講座
 5日 組織拡充小委員会
 6日 第十二組組門徒会
 7日 あいあう会
 10日 第十三組組門徒会
 12日 共学研修会【佐野明弘】、『如大地』編集会議
 13日 秋安居事前学習会①
 15日 ご命日のつどい【淵上知明】
 17日 解放運動推進協議会、第十三組教区改編説明会
 18日 秋安居事前学習会②

3月

- 25日 声明作法講座
 26日 秋安居事前学習会③
 2日 寺族研修小委員会
 3日 北陸連区真宗開明の会推進員交流研修会（～4日）【中止】
 4日 秋安居事前研修会④【中止】
 5日 教区坊守開法会【中止】
 6日 あいあう会、合唱『コール菩提樹』練習
 9日 別院教化委員会「企画会」
 10日 富山・高岡教区改編地方協議会、声明作法講座
 11日 秋安居（～12日）【中止】
 13日 社会教化小委員会
 15日 ご命日のつどい【鷲尾祐恵】
 17日 解放運動推進協議会
 18日 『如大地』編集会議
 19日 富山別院彼岸会【藤原千佳子】
 20日 〃 【伊藤俊作】
 21日 〃 【野田博俊】
 23日 別院教化委員会「総会」
 24日 声明作法講座
 25日 真宗教学講座【中止】
 26日 得度事前研修会【中止】
 30日 得度研修会（～31日）【中止】

4月

- 7日 正・副組長会
 8日 あそび環境研修会【中止】
 9日 婦敬式リーフレット作成委員会
 13日 解放運動推進協議会公開講座【中止】

5月

- 14日 手づくりおもちゃ講習会【中止】、あいあう会、
 声明作法講座、法話研修会【中止】
 15日 組織拡充小委員会
 16日 『如大地』編集会議
 17日 結の会
 20日 坊守会開法講座【中止】
 28日 声明作法講座
 30日 解放運動推進協議会

6月

- 1日 五一会（教区内物故住職追恩法要）
 14日 教区会（臨時会）
 20日 富山別院院議会
 28日 教化委員会「総会」
 23日 社会教化小委員会
 24日 真宗教学講座【中止】
 27日 青少年教化小委員会、あいあう会
 28日 声明作法講座
 29日 組織拡充小委員会

※3月以降、新型コロナウイルス感染症拡大防止の対応に
 ともない、各種研修会等は中止しております。

書籍のご案内

本年度、新たに左記書籍を購入いたしました。
既存の書籍とともに閲覧及び貸出が出来ます。ご利用ください。

図書名	著者名	発行元
浄土真宗聖教全書 1～同6		本願寺出版社
『月刊 住職』		興山舎
はじめてふれる親鸞聖人伝絵	沙加戸 弘	東本願寺出版
女性のいない民主主義	前田 健太郎	岩波書店
清沢満之全集 別巻1		岩波書店
親鸞の宿業観…歎異抄十二条を読む	廣瀬 杲	法蔵館
必携 真宗事物の解説	西原 芳俊	東方出版
なぜ人はカルトに惹かれるのか	瓜生 崇	法蔵館

敬 弔

ご生前のご功労を偲び、謹んで哀悼の意を表します。

《住職》

第十組	長龍寺	前住職	富田 博	二〇二〇年一月十四日 寂
第十一組	入覺寺	前住職	齊藤 學 眞	二〇二〇年一月十五日 寂
第十二組	勝福寺	住職	大中臣 春 樹	二〇二〇年三月十三日 寂
第十組	専福寺	住職	今 湊 憲 英	二〇二〇年三月十八日 寂
《前坊守》				
第十一組	願成寺	前坊守	立 白 章 子	二〇二〇年六月十一日 寂

訃 報

かねてより病氣療養中の富山教区雇員の竹本雅代さんが三月二十九日逝去されました。謹んでお悔やみ申し上げます。

編集後記

このたびの『如大地』の編集は、未曾有のコロナ禍にあつて、以前のように、教務所で編集会議を開催することがほとんどできず、主にメールと電話を利用しての活動となった。

今回のコロナ禍は、あまりに多くの生活上の困難と経済的な疲弊等々をもたらしたことは言うまでもない。それとともに、人々の心の奥に、いつ何に關してどのような形で顕現するかも分らないが、誰もが各種の「差別意識」の「種」を有していることを、恐ろしいほどに明確にあまり出したとも言える。無くなったと思っていたはずの心、解決していたはずの事柄が、実際には、人々の心の奥に、形態を変えていつまでも残存し続けているのである。

また、人権・民主主義の先進国アメリカにおいても、白人の警察官が黒人の容疑者に対して必要以上の暴行を加え、死に至らしめるという悲劇が、またまた繰り返された。これも、既に、同様のことが何度も行われ、反省されてきたはずの行為である。

さらに、少し視点を変えて社会的な事象に目を転ずると、東京オリンピックの開催のための一連の運営に關しても、日本という国が、国民が素朴に信じていたほどにはしつかりした国ではない面が多々あることを次々と実感させられた。誘致当初にアピールしていたはずの「成熟した大人の国のオリンピック」とはほど遠い初歩的なドタバタ劇をスタートから演じてしまったのである。

このように、「日ごろは意識されずに、既に解決されているもの」と思い込んでいた諸問題が、少しずつ改善はされているのだから、実際は、自他の心の奥や社会の根底に存在し、それが何かをきっかけに顕現するかもしれないことを、絶えず自覚していなければならぬ。

そのような中で、今回は「帰敬式」をテーマとして、日常的な疑問に対する回答や、既に自坊で実施しておられる方の状況、実際に受式されたの感想、等々が寄せられた。帰敬式をとおして、「見えていなかったものを見る」「聞こえていなかったものを聞く」新しい道のための機縁となるのである。しかし、日々の営みに忙殺されているなかで、少し時間がたてば、最初の思いも忘れてしまいがちなもの、人なるがゆえのことである。仮にそうだとにしても、仏弟子となった喜びや感動や自覚を一度「体得してみる」ことも、それはそれで、重要なかもしれない。

第十三組 雲龍寺 藤谷 英順

『如大地』第147号はいかがでしたでしょうか。本誌を読まれてのご感想、ご意見等につきましては、同封のアンケート用紙にて富山教務所までご連絡ください。アンケートへのご協力をお願いいたします。